

山口県立大学公開特別講演会
山口県立大学同窓会桜園会公開講座



中村 哲氏 講演録

演題 医者^わが井戸^けを掘る理由

主催／山口県立大学

共催／山口県立大学同窓会桜園会

2009.11

講演日時：19年11月20日（火）

12：50～14：20

講演会場：山口県立大学講堂（桜園会館）

講演者略歴

中村 哲：なかむらてつ

ペシャワール会現地代表

ペシャワール会医療サービス総院長

1946年福岡市生まれ。

九州大学医学部卒。

専門は神経内科。

国内の診療所勤務を経て、

1984年パキスタン北西辺境の州都

ペシャワールに赴任。

ハンセン病を中心としたアフガン難民の

診療に携わり現在に至る。

著書

『ペシャワールにて』

『医者井戸を掘る』

『アフガニスタンの診療所から』他

映像：アフガニスタンという国で

（一部掲載）

<ナレーション>干ばつを克服し、農村を復興しなければ、人々の平和な暮らしは取り戻せない。医師の中村さんは、この地でこれまで培ってきたすべてをかけ、新たな事業に乗り出しました。

氷河の雪解け水を源流とする大河川クナル川の水を干上がった高台に引き入れることができれば、3,000ヘクタールの農地がよみがえり、十数万人分の食糧を生産することが可能となります。

中村さんは、土木工学を独学で学び、巨大な用水路をつくる計画を練り上げました。砂漠化した大地を掘り進めるには、大量の人員と建設資材が必要です。総工費10億円の建設費は、日本からの募金ですべて賄います。

2003年3月19日、水路工事が始まり、作業には600人を超す現地の人々が参加しました。用水路ができれば、田畑を耕し、生活の糧を得ることができます。家族と共にふるさとで暮らす。その目標に向かって、人々が集まりました。

今も、テロ掃討のための空爆は続いています。頭上をヘリが駆け抜ける戦乱の地で、中村さんは奮闘し、用水路は10キロを突破。田畑への通水が始まりました。命の水を求め、中村さんとアフガニスタンの人々の挑戦は続いています。

<中村氏>ここで特に強調したいのは、平和とは何かということ。戦争とは何か。同時に、人が平和に生きて、平和に暮らしていくというのは一体どういうことなのか。この国にいと、それが本当に浮き彫りに

して見られるわけです。

病気や戦争で死ぬ人もたくさんいます。けれども、逆に命の輝きとでもいいですか、影があればあるだけ光もあり、それがくつきり浮かび上がって見えるわけです。

実は、これは人間ならば同じ、日本でも同じことなのです。けれども、特に命、平和とは何かということが、この国の事情を紹介することによって浮き彫りにされてくるのではないかと思っているわけです。

講演

皆さん、こんにちは。中村です。今朝8時に福岡空港へ着きまして、やっと間に合いました。

今、アフガニスタンとパキスタンで何が起きているかということについて、ほとんど日本では知られていません。私がこれまで経験した中で、現地は最悪の状態にあります。日本に帰って驚きますのは、こういった実情があまり伝わらない中で、国際協力だとか、テロ特措法だとか、議論されていることです。

私は政治的なことが大嫌いです。まず実情を知ってから、いろいろな意見を持っていただきたいと思っています。

先ほど、映像で紹介された内容とダブるかもしれませんが、私が、いろいろな政治的な意見を述べたり、平和とはこういうものだと言ったことと説教がましいことを言ったりするよりも、私たちが歩んできた二十数年間をそのまま皆さんに紹介することで、平和とは何なのか、地域の人々が集まって協力し、助け合うとはどういうことなのか、

そのヒントが得られるのではないかなと思っております。

今日のタイトルは『医者が井戸を掘る理由』ですが、私の話の中から、それをくみ取っていただきたいと思います。

ペシャワール会とは



ペシャワール会というのが日本にありまして、この支えにより、経済的な面とワーカーの派遣という両面の支えによりまして、現地にPMS（ペシャワール会医療サービス）病院というものがあります。これが現地の活動母体です。ペシャワールという、パキスタンの北西部、アフガニスタンとの国境の町に拠点があります。ここを中心に、先ほど紹介されました医療活動などを行っています。

また、あとで詳しく言いますが、アフガニスタンは世紀の大干ばつが、なお進行中です。2000年だけで終わったものではありません。年々ひどくなっておりまして、特に今年は、すでに8月下旬に真冬の水位になるぐらい、川の水が干上がっています。そこで我々としては、できる範囲で農作物の自給率を上げようとして活動しているところです。

アフガニスタン側のジャララバードという町を拠点にしまして、水源確保事業をおこなっております。これに携わるために現地で雇用された職員が約200名。現地で助っ人として働く若者が20名前後。作業員として、一時雇用で働く人々が、多いときで700名から800名、合計約1,000名が私たちの活動に従事しております。これを支えるのがペシャワール会でありまして、日本の良心的な人々と現地の人々の努力が一体となって仕事が進められているということです。

谷深い故の割拠性、自治性

いつも言うことですが、アフガニスタンという国は、いまの日本人にとって一番わかりにくい国の一つです。いくつか、これだけは知っておいていただきたいことを紹介します。

まず、アフガニスタンは山の国です。東のヒマラヤ山脈から続きまして、世界の屋根の西側をつくっているところがアフガニスタンだと考えればいいかと思います。国土は日本の約1.7倍ですが、そのほとんどがヒンドークシュ山脈という標高6,000メートル、7,000メートルという巨大な山脈で占められております。

こういった地理的な条件がどういうふうに国民生活に反映するかといいますと、まず、山の規模が大きくて深い。つまり、日本で言えば長野県を何十倍か膨らませたようなところを想像していただければと思いますけれども、谷が深いために、悪く言えば割拠性、よく言えば自治性が非常に濃厚な地域であるということです。

さらに、アフガニスタンという地域は、古来、シルクロードの時代から民族の十字路と呼ばれたところであり、わかっているだけで20以上の民族、さらに、それ以上の部族が谷ごとに国をつくって暮らしているようなところなんです。つまり、我々が考えるような統一された国民国家というよりは随分隔たりがあるということです。

雪がなければ食っていけない

それと同時に、さらに重要なのは、ヒンドークシュ山脈の白い雪。アフガニスタンの人口は2,000万人とも2,500万人とも言われておりますけれども、そのほとんどと言っていいぐらいの人々、最低の見積もりでも8割以上が農民である。遊牧民を入ると9割以上であろうと言われております。

つまり、アフガニスタンの底力は農業にあるわけです。あの渴いた、乾燥した中央アジアにおいて、二千数百万人の人々がどうやって食っていいのかといいますと、この白い山の雪のおかげです。何万年もかけてできあがった氷河、それから冬に降り積もった雪が夏に溶け出してきて、川沿いに豊かな実りを約束してくれるということで、何万年だか何千年か知りませんが、人も動物も植物も、そうやって命を保ってきた地域です。

アフガニスタンでは、「金がなくても食っていけないけれども、雪がなくては食っていけない」という有名なことわざがあります。まさにその通りでありまして、雪、すなわち自然の水。貯水槽として蓄えられた白い雪が、アフガニスタンの生命源という

ことです。

逆に「雪がなくても食っていけるけれども、金がなくては食っていけない」という日本の社会とは、ちょっと違うのです。これが、なかなかわかりにくい点です。しかも自給自足の国ですから、自分の食物は自分で育てる。徹底した独立主義の精神が強いところだと思います。

きずなとして存在するイスラム教

国民の100%近くがイスラム教徒でありまして、それもおそらく世界で現存するイスラム教徒の中で、最も保守的で古典的なイスラム教の世界です。保守的だから過激かという、決してそうではありません。

イスラム教という、最近日本に伝わってくるニュースというのは、内乱だの自爆テロだの暗い話が多いですけれども、実際の現地へ行きますと、生活者としてはそのへんを歩いているおじさん・おばさんと、ちっとも変わりはないのです。

ただ、違いますのは、先ほどアフガニスタンは自治性の濃厚な、多民族国家だというような意味のことを言いましたが、アフガニスタンという天下はあるわけで、これを結び付けるのがイスラム教です。

イスラム教というのは、単に我々が考えるような個人的な信心や宗教だけではなくて、各地域を束ねるコア（核）的な役割を果たすと共に、各地域間を結ぶ、アフガニスタンという一つの天下にまとまりを与える重要なきずなとして存在しているのです。その点が随分わかりにくい点です。

生死にかかわる貧しさ

都市部に行きますと、貧富の差がはなはだしいのです。世界中で似たような現象ですけれども、特にアフガニスタン、パキスタンではそうです。私たちは医療活動をふりだしにして始めましたけれども、まず思ったのは「むなしい」ということです。

現地にくら進んだ医療技術を持ち込んでも、その恩恵を受ける人は、わずかに握りなのです。少しお金のある人は、ちょっとした病気でもロンドンや東京やニューヨークに簡単に飛んで行って、簡単に治療を受けることができます。けれども、99.9%のほとんどの人々は、数百円どころか数十円のお金もなくして死んでいくという世界です。

したがって、いかに少ないお金で、いかに多くの人々に恩恵を施すかということに特別な配慮をせざるを得ない世界であるということです。

治療センターの充実とは言うものの



私たちの活動は 1984 年、「らいコントロール 5 年計画」とともにペシャワールで発足しました。らいは、現在ではハンセン病と言われておりますけれども、当時、ペ

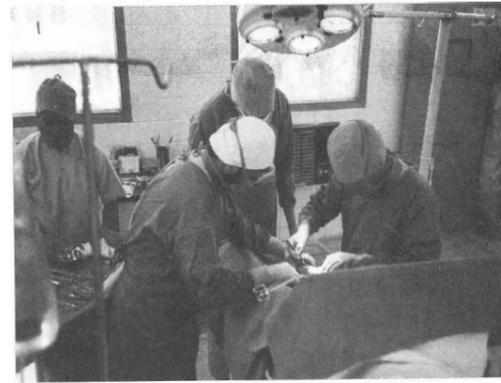
シャワールには 2,400 名の患者がいて、私の任務は、この 2,400 名の患者に対する治療センターの充実ということでした。

行ってびっくりしました。写真に写っているのは、当時あったすべての医療器具です。2,400 名の患者に対して、ベッド数はずか 16 床。今日はハンセン病の詳しい話はしませんけれども、ハンセン病というのは、単に薬で治る病気ではなくて、目がやられたり、神経がやられたりします。整形外科、形成外科、眼科、神経病科、皮膚科など、いろいろな分野が総合して「らい病学」というのが出来上がっているのですが、これがまともに治療できる状態ではなかったのです。

あるのは壊れた聴診器が 1 本。耳にはめると、けがをするのです。また、ねじれたピンセットが数本。押すと倒れるトロリーが 1 つ。これは足が 4 本あるようだけれど、1 本折れているのです。押すと倒れるので 2 人で抱えて持っている状態です。いくら医療は精神が大事だといいますが最低限の物や金はあるわけで、さすがにショックを受けました。そこで私たちは募金活動を活発化させまして、現在に至っております。

現在、二十数年の積み重ねを経まして、ハンセン病に必要な合併症は、ほぼすべて治療できるようになりました。アフガニスタン全土、パキスタン北部で唯一のハンセン病の合併症の治療センターとして、現在、ペシャワールで機能しております。

現在、登録された患者は 7,000 名を突破しまして、最終的には 2 万名になるだろうと推測されております。こういった患者の力強い後ろ盾として機能しております。



こうした写真を見せると、たしかに私が医者で医療活動をやっているということがよくわかります。けれども、私たちの活動では、医療とは無関係にみえるところで、ほとんどのエネルギーが費やされてきたわけです。

現地の人々の心を理解すること

最も大切なことは、目立たないようにすけれども、やはり現地の人々の心を理解することです。これは、いまだに一つの大きな課題であり、いまでも悩むところなのです。医者ならばすべて同じですけれども、患者が何を訴えたいのか、どこを治してほしいのか、どうしてほしいのかというのがわからないと、診療というのは成り立ちません。

これは日本でも現地でも同じですけれども、外国人の犯しやすい過ちというのは、現地に行きまして、自分の見慣れないもの、なじみのないものに対して、単なる違いであるものを、善悪、優劣という色分けで決めつけてしまうことが、しばしばあります。

ごく一例を挙げますと、現地では女性が外出する時、ブルカというかぶりものをする慣習があります。特に若い娘がそうなの

です。人に肌を見せるというのは非常によくはない、不道德な行為とみなされるのです。私たちが聴診器を当てるにも、それだけで変な目で見られることもありますので、服の上から当てるのが普通です。

こういった慣習に対して、たしかに我々の目から見ると不便ですけれども、その地域の文化まで否定するようなことを外国人は簡単にやる。こういった慣習というのは、許すべからざる男女差別であるということで国際人権委員会に訴えるのは自由です。けれども、私たちが言いたいのは、「では、そこまでこの患者のことを心配してくれるなら、あなた、連れて行って面倒をみてください。残って世話をせざるを得ない我々はどうするのか。家族はどうするのか。」

どうしても先進国の人々は、自分の頭の中だけでものを考えて判断してしまう。実際には、その文化の枠内で解決できることがたくさんあるわけです。

こういった女性患者に対しては外人部隊に頼らざるを得ない。女性の患者は、女性の医療関係者が診ればいいということで、多くの看護師さん、女医さん、女性の医療ワーカーが現地に赴きまして、彼女らの診療に力を尽くしました。いま現在では、彼女らの手によって少しずつ女性の医療関係者も育ちつつあります。

このように、私たちは、その地域の文化や慣習に対して、好き嫌いの問題はあるでしょうけれども、一切、いい、悪いという目で見ない。地域の価値観の枠内で解決するというのを一つの鉄則としました。

「相手のことをわかる」と簡単に言いますが、もう 30 年ぐらい一緒に住ん

でいる家内の気持ちもよくわからないのに（笑）。

慣習も違う、言葉も違う、文化も違うというところで、国際医療協力などという美しい言葉があっても、そう簡単なものではないと私は思っています。やはり、その地域なり人を理解するには、それなりの忍耐と時間がかかると。しかも、実際的でなければならぬということなのでしょう。

アフガン戦争



私たちが赴いたのは、1984年。アフガン戦争の真ただ中。アフガン戦争は、1979年12月、当時、世界最強の陸軍と呼ばれたソ連軍の精鋭部隊、約10万人が大挙してアフガニスタンに侵攻するという事件が発生します。

その後、約10年間、アフガニスタンは戦渦にさらされまして、このアフガン戦争で死亡したのは約200万人以上。つまり、国民の二割が、この戦争で死亡したのです。さらに600万人が難民となって国外に流出しました。

特にペシャワールは、アフガニスタンのパシュトゥン族と言葉も民族も一体のところですから、ペシャワール周辺、北西辺

境州と呼ばれるパキスタン領内に約300万人の難民が流れ込み、私たちも医療の立場からアフガン問題に飲み込まれていきました。

診療方針の転換

初めは、細々と難民キャンプで医療活動を行っていましたが、ここで私たちは大きな方針転換をしました。それはどういうことかと言いますと、ハンセン病コントロール計画そのものが、先進国の着想であると。もっと詳しく言うと、ハンセン病だけを診る診療というのは、アフガニスタンやパキスタンの北西辺境州では、絶対に成り立たないということなのです。

ハンセン病が多い地域は、ほかの感染症、つまり結核、マラリア、腸チフス、デング熱、脚気、流行性肝炎と、ありとあらゆる感染症の巣窟であることがわかります。

しかも、こういったハンセン病を含む感染症というのは、アフガニスタンの山岳部、山奥の貧しい村々に多発しておりまして、私たちとしましては、かたやマラリアで死にかけているのに、あなたはハンセン病ではないから診ないというわけにいかないのです。

それで、私たちは方針を転換しまして、内戦が下火になった暁には、山村の貧しい村々に診療所を出しました。そこで一般の診療活動をしながらか、ハンセン病もいろいろな感染症の一つとして特別扱いせず診るという方針を打ち出しました。

アフガニスタンの、ほとんどすべての山岳地区は無医地区ですので、アフガニスタンの無医地区における診療モデルの確立

ということも、もう一つの大きな目標として掲げるようになったのです。

当時、内戦の真ただ中でしたけれども、アフガニスタンとパキスタンを隔てる2,400キロメートルの国境を完全に閉鎖することはできず、人々は自由自在に往来できました。表向き国境は閉鎖されておりましたが、私たちは山越えをしました。

幸い私、頭はそんなに強くありませんけれども足だけは強かったので、谷から谷へ、山から山へと歩きながら、診療所開設予定地の人々と付き合いを深めていったわけです。

普通のアフガン人の感覚



これは、ヌーリスタンと呼ばれるアフガニスタンでは最も高いところに住んでいる民族の居住地の一つです。標高が2,500メートルから3,000メートルです。

当時、ペシャワールから歩いたり、ときどきジープに乗ったりしましたが、最低1週間以上かかりました。しかし、驚いてはいけません。これがアフガニスタンの山奥の村々での普通の光景なのです。この状態は、いまでもほとんど変わっておりません。皆さんがよく映像でご覧になるアフガ

ニスタンというのは、ほぼ、ジャーナリストが行きやすい首都カブールに限定されているのです。カブールというのは、アフガニスタンでは非常に特異な存在でして、こういった村々から見ると、外国以上に遠い存在だと人々は思っているのが現実です。

当時も今も、そう変わっておりません。首都カブールでどんなに政権が変わろうとも、地域の人々の暮らしは、ちっとも変わらない。これがアフガニスタンの現実です。

地元の人に聞いてみたら、「最近までロシア人がいた」これはソ連のことですね。「最近ではアメリカ人が入ってきている。わしらとは関係ない。やつらが来たって、自分たちの暮らしは、ちっとも変わりはないんだ」というのが、一般的な、普通のアフガン人の感覚です。

平和の国・日本というイメージ



この村に行ったとき、これも15年以上前ですけれども、私はフランス人と間違えられました。それまで「チャイニーズか、ジャパニーズか」と聞かれたことはしばしばありましたが、さすがに「フラン

ス人」と言われたのは初めてでした。悪い気はしませんでした、あとで知りましかれども、村長さんは外国というフランスという国しか知らなかったということらしいのです。

「いや、日本人です」と言うと、手のひらを返したように親切にしてくれるようになって、まるで外国人ではないかのように扱ってくれました。単に日本人であるために、命拾いしたり、仕事があまくいくようになったりすることが、ごく普通にあったのです。

それが最近では、単に日本人であるがために攻撃の対象になることが一般化しつつあるということは、ぜひ現地から伝えたいと思います。

どうして日本人がそんなにもてたのか。それは、どんな山奥に行っても、彼らアフガニスタン人は、みんな日本を知っているのです。そして、日本について連想するのが三つあります。日露戦争、広島、長崎。この三つは、どんな山の中に行っても、どんなに学問のない人でも、みんな知っているのです。

日露戦争について言いますと、100年前のアジア世界がどういう状態だったかという、日本と、アフガニスタンと、タイと、ごく一部の国を除きまして、すべてのアジア世界はヨーロッパやアメリカの植民地、ないしは半植民地状態でした。そこに、こともあろうに、極東のちっぽけな国、日本が、時の超大国ロシアと戦争を始めたのです。

「かわいそうに、あの日本もロシアの属国か植民地になるのか」と世界中が思っていたのですが、勝ったとは言えないまでも、

これを撃退したと言うことはできる。このニュースは、アジアの人々の間に、民衆のレベルでたちまち広がりまして、いまだに語り継がれ、勇気を与えてきたのです。

戦争がいいということではありません。非常にちっぽけでも、相手がどんなに大きくても、理不尽なことには抵抗する日本という「美しい誤解」が根を下ろしているのです。

それから、広島、長崎について言いますと、「かわいそうに、あんなむごいことをされて」という同情だけではなくて、あの廃墟から、日本は見事に経済復興を成し遂げたということです。

彼らはよく知っているのです。経済的に羽振りのいい国というのは、必ず戦争をする。戦争がなければ彼らは生き延びられないということを、アフガン人のみんなは、よく知っています。しかし、日本という国だけは、少なくとも外国に軍隊を出したことがなかった。平和な国、日本というイメージが根を下ろして、それが最近まで続いていたということなのです。

これが片思いにせよ、誤解にせよ、6階にせよ（笑）。これは、日本のあるべき国の姿を示しているわけでありまして、それが最近、特にアフガン空爆以後、「日本よ、おまえもか。ちょっとした石油の利害のためには、簡単に兵隊を出すのか。」あるいは、強い者にはペコペコして、弱い者には居丈高になる日本というマイナスのイメージが急速に拡大しているということが、ここ6、7年間のアフガニスタンの状態です。

このことは、ぜひ伝えておきたいと思います。

ソ連軍の撤退

その後、無敵と呼ばれたソ連も10年もちませんでした。アフガニスタンは、おそらくソ連の衛星国になるだろうと世界中の評論家が自信たっぷりに言っていたのです。ところが、10年もたたずに、ソ連軍は疲れて撤退を始めます。これが1988年の出来事です。

1989年の2月まで、全兵力10万人がすべて撤兵し、その後、混乱が続きました。これを統一して登場したのが、7年前の2001年、アメリカによって倒されたタリバン政権でありました。

私たちは、ソ連軍の撤退した直後、アフガニスタンが大混乱しているときに、やっと活動する時期がきたということで、帰ってくるアフガン難民を迎え入れるように診療所を建てていったのが1990年頃からでした。

関心が薄れたときに力を注ぐ

そうこうするうちに活動開始から15年たちまして、どうも先は長そうだがということが、だんだんわかってきました。何でもそうなのでしょうけれども、日本でもハンセン病というのは1世紀かかっても問題が残っているほどなのに、我々外国人が、事情のわからないまま現地に行って、即席で何かを成し遂げて、「やった、やった」と言って引き揚げられるものではなからう。おそらくハンセン病の問題というのは、今後、何十年も続くであろうというのが私たちの読みです。

さらにハンセン病問題について、私が言いたいことがあります。これはアフガン問

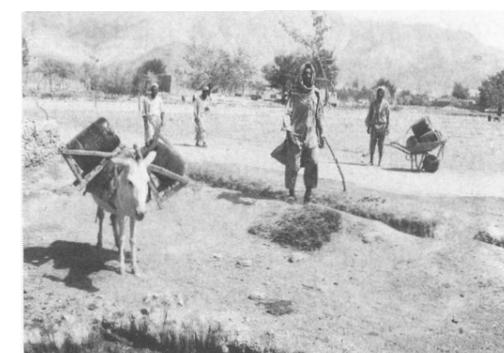
題も同じですけれども、人々の関心が集中するときには物も人も金も集まりますけれども、関心が薄れてしまうと、「本当に、ハンセン病コントロール計画は存在したのか」というぐらい、ずっと引き揚げてしまうのです。

→ 私たちの方針としては、みんなが「我も、我も」と押し掛けるときには行かないということです。そのときは誰かがやるのです。そこにニーズがありながら、誰もが行かなくなったときに力を注ぐということです。

ハンセン病コントロール計画が世界的に引いていく中で、私たちとしては、「とんでもない、患者は増え続けている、今は引くべきところではない」と考えました。「むしろ活動を増やさなくてはいけない、先は長い」ということで、活動開始から15年を契機とし、1998年の4月、現地に社会福祉法人として根を下ろし、PMS病院を建てたのです。

この病院の組織が続く限りは、アフガニスタン、パキスタンで半永久的な活動ができる基地を得たわけです。

大干ばつによる飢え



アフガニスタンという国は本当に気の

毒な国です。先ほど言いましたようにソ連撤退後の混乱を收拾して、やっとタリバン政権が国土を統一し、治安が格段に良くなったところ、今からというときに襲ったのが、世紀の大干ばつです。

あれは、ものすごいものでして、2005年5月にWHO（世界保健機関）が発表した内容は危機迫るものがありました。現在進行しつつあるユーラシアの大干ばつというのは、おそらく人類が体験したことのない規模で急速に進行しています。

2000年5月の時点で、既に6,000万人が被災し、中でも最も激烈な被害を受けたのがアフガニスタンです。人口の約半分に相当する1,200万人が被災し、そのうち、飢餓線にある者が500万人います。つまり、三度三度のご飯が食べられない人たちが400万人です。それから餓死線上、放っておくと死んでしまう人々が約100万人という訴えを起こしました。しかし、これに対して、ほとんど国際援助の手は届かなかったわけです。

実際に私たちの診療所の周りでも、次々と村が消えていくのです。去年まで緑豊かな田園地帯が、1年もたたないうちに砂漠化しました。当時、アフガニスタン全土の家畜が9割死滅したと言われています。とにかく家畜以外に財産がありませんから、家畜や子どもが死ぬ前に村を捨てているのです。そのためにゴーストビレッジとでもいいますか、廃村が次々と広がっていったわけです。

知ってほしいことは、これは、そのときだけではなく、今も進行中だということなのです。あれだけ100%近くの食糧自給率を誇っていた自給自足の誇り高いアフ

ガン農村でしたが、今や食糧自給率は半分以下に落ちているということです。それだけ人々が飢えているということなのです。私たちの診療所の周りでも、こういった砂漠化が急速に進んでいきました。

餓死者 100 万人



餓死者が100万人と言いましたけれども、おそらく、これは誇張ではなかったと思います。というのは、当時、死亡したのはほとんどが子どもであり、赤痢、腸管感染症といいますが、下痢症が圧倒的に多かったのです。

どういうことかと言いますと、餓死というのは皆さん、あまり見たことがないでしょうけれども、おなかがペコペコになって、力尽きて、ぼったり倒れてしまう死に方をする人は、ほとんどおりません。餓死の末期というのは、体がだんだん弱ってきまして、栄養失調になり、抵抗力がなくなってくるところで感染症となります。最も多かったのは赤痢、そして普通の下痢症です。脱水状態になり、抵抗力がないのでコロリと死んでしまうという死に方がほとんどでした。

子どもは抑制がききませんから、汚い生

活排水、台所の水でも飲んでしまうわけです。そして下痢になって命を落とします。普通なら下痢ぐらいで命を落としません。けれども、栄養失調、食べ物の欠乏と清潔な水がないという背景があるものですから、こうやって多くの子どもたちが死にました。

当時、ときには何日も歩いて、若いお母さんたちが小さい子どもをしっかりと胸に抱いて診療所にやってくるのです。まだ生きてたどり着くほうはましで、たどり着いても外来で待っている間に自分の子どもが死んでいく姿が、ごく日常的に見られたわけです。ですからあの当時、WHOが「100万人が餓死寸前だ」と言ったのは、決して誇張ではなかったと思います。

井戸の再生



私たちとしましたら、清潔な水、十分な食べ物さえあれば、病気の9割どころか99%はなくなるということを確認しました。まず、残った村人たちを集めまして、枯れた井戸を再生させるために、さらに深く掘っていきました。

さらに、乾燥した地域に、次々と清潔な飲料水源（井戸）を獲得する活動を始めた

のが2000年の7月で、これは現在も継続されております。現在では、約1,500カ所で清潔な飲料水源が確保され、数十カ所、35万人以上の人々が、ともかく自分の村を離れずに暮らせる状態になりました。

先ほど、アフガニスタンは農業国家であり、国民のほとんどが農民であると言いました。しかも自給自足なのです。「雪がないと食っていけない」と言いましたけれども、まさにその通りです。その雪そのものがヒンドークシュの山から消えて、さらに農業用水がなくなるという状態でした。



写真に写っているのはカレーズと呼ばれるもので、アフガニスタンの山間部では普通に見られる伝統的な灌漑方法で、簡単に言うと横井戸です。山の斜面へ、水平に穴を掘り進め、地下水脈を水平に導き出すというものです。

名前はカレーズでも、これが枯れるのです。それで私たちは、診療所周辺のカレーズ40カ所の再生に手を尽くし、そのうち38カ所の再生に成功しました。その成果には、目を見張るものがありました。



これは2000年9月15日。私の誕生日でしたのでよく覚えておりますけれども、診療所付近の様子で、ほぼ砂漠化した状態です。

雑草でいいから生えてくれという状態でしたが、ここでカレーズの再生をして早めに水を注いでやると、7カ月後には驚くように変化しました。



「違うところを撮っているんじゃないか？」と何度も言われましたけれど、本当の姿です。

緑色に見えるのは小麦です。水がきたといううわさだけで、住民はみんな帰ってくるのです。何も大げさな「難民帰還プロジェクト」という計画を立てなくても、人々がその地域で生活していける基盤ができればいいのです。

自分のふるさとで家族と一緒に暮らせ

て、ご飯が十分に食べられる以上の望みをいただく人は、私は少ないと思います。みんな自然に帰ってきて耕作を始めるのです。ということで、診療所の周りにも、ひとりでに約9,000人が帰ってきて村が復興するという奇跡を目の当たりにし、農業用水の獲得にも力を注ぐようになりました。

国連制裁による転機

私たちが最初に思っていたのは、「こんなに悲惨な出来事が国際的に話題にならないはずはない。自分たちは小さな団体だけれども、できる範囲で、限られた地域で頑張っていこう」ということでした。けれども、やってきたのは国際援助ではなく、国連の制裁でした。

2001年1月、国連は前の年、ペルシャ湾岸で米軍の駆逐艦が自爆攻撃を受けたのに対応しまして、当時、テロ組織であるアルカイダのメンバーをかくまっていたと言われるタリバン政権、アフガン政府を制裁します。それが発動されたのが2001年1月でした。これがアフガニスタンの転機なのです。

繰り返して言いますが、国連制裁が、アフガニスタンの変わり目でした。

それまでアフガニスタンは、なんとか国際的な地位を得ようとして、ケシ栽培の撲滅を図り、2001年には激減していました。そして、対話を重視していたグループもいた。

けれども、国連の制裁によって内部の過激な意見が主流となり、その後、バーミヤンの仏石破壊、さらに9月11日のニューヨークテロ事件が起きます。すると翌日か

ら、アメリカのブッシュ大統領がアフガンへの報復爆撃、「これは、我々の十字軍である」などと物騒なことを言い始めました。

私もキリスト教徒の端くれですが、悪いことに、ブッシュ大統領と同じ教派に属するキリスト教徒で恥ずかしい思いをしました。報復などという物騒なことは、聖書のどこにも書いていません。ましてや十字軍などという言葉は、一度も聖書には出てきません。私に言わせれば、あれは反キリスト教的な行為であります。

命の尊さに変わりはない

ともかく、この空爆によって数万人の人が命を失いました。あの当時、日本中もどうかしていたのです。7年前のことですけれども、私が今と同じようなことを言うと、「おまえはテロリストの味方なのか、タリバンのスポークスマンになったのか」と非難されました。

私が言いたかったのは、「アメリカ人であろうと、アフガン人であろうと、日本人であろうと、命の尊さに変わりがあるのか」ということです。

ニューヨークのテロ事件で死んだ罪のない二千数百名の人々については、世界中から哀悼の言葉が届けられました。けれども、あの報復爆撃、その後、いまだに続く空爆で死んだ数万人、あるいは十数万人の人々に対して、哀悼の意は一言も聞かれません。私は、ここに何か矛盾したものを感じるわけです。

ともかく、あの冬の迫る時期に首都カブールが空爆されるとどうなるかというのは、アフガン人なら誰でも知っていたはず

です。しかも、餓死線上の人間が100万人というときに、国連が食糧制裁までしたというのは、アフガン人にとって強い外国人不信を広げることになりました。

空爆下での食糧配給

あの冬の迫る時期にカブールにあふれていたのは干ばつ避難民ばかりであり、中流階級以上の人々は、ほぼ国外に逃れていたのです。「その中に、ご丁寧に爆弾を落とすとは」と思いました。それよりも「食べ物の雨を降らせよ」と日本中に「いのちの基金」というもの呼び掛けました。



そこで2001年の10月から11月にかけて、私たちは空爆の中、必死で餓死寸前の人々に食糧を届けました。全部で1,800トンの小麦粉が、十数万人の餓死寸前の人々に届けられたというのは、うそのような本当の話です。

あの当時のことを考えると、いかに先進国社会の中での戦争の議論は空疎なものかというのが、あらためて思い出されます。あの当時、軍事評論家と自称する人々がテレビに出てきては、まるでゲームでも見るかのように戦争を論じていました。だいたい、どこそこがやられて、次はどこだろう。

語るの簡単ですけども、まるでゲームを見ているかのようでした。

ピカッと光るたびに、あの光の下で何百人という人々が一瞬にして死亡するという想像力に、日本中が欠けていたと言わざるを得ないのです。もう、とんでもないことです。しかも、ピンポイント攻撃といって、これはテロリストだけを標的とする人道的な攻撃なんていう議論を、普通に日本人がやっているのです。とんでもない話です。あれは無差別爆撃です。

食糧配給部隊 20 人を送り出すにあたって私が指示したのは、「1カ所に固まるな。1カ所に固まったら、1発の爆弾で君ら全員が死亡する。そうすると食糧配給はできないので、3カ所に分宿しなさい。1チームが全滅しても、ほかのチームは食糧配給を続行する」と言い渡しました。死にそうになったことはありませんけれども、飢え死にしそうな人々に食べ物を届けるという任務を終えて、彼らは無事に帰ってきました。

あたかも私一人が活躍しているように言われますけれども、実際には、現地の勇敢なアフガン人たちの協力、いろいろな形で支えてくれる住民たちの力で私とペシヤワール会の仕事が成り立ってきたということです。

民主化という言葉の裏にある真実

その後、アフガニスタンの民主化が世界的に宣伝されました。悪の根源、タリバンが倒され、絶対の自由と正義の味方、米国が勝利した。民主国家がアフガニスタンに誕生し、人々は自由を享受し始めたという

映像が、繰り返し繰り返し流されました。日本人というのは忘れっぽいもので、「何か、いろいろあったけれども、戦争というのはたしかに悪いことだけれども、まあ、これでなんとか落ち着いたのかな」という印象を残したまま、アフガニスタンは忘れ去られていきました。



たしかに、いろいろなものが解放されました。写真に写っているのはきれいなピンクのお花畑ですけども、これはケシ畑です。絶滅に近かったケシ栽培が、米軍の進駐と同時に復活しまして、昨年の時点で、アフガニスタンは世界のケシの 93% を 1 国で生産する麻薬大国になりました。

解放されたのは、ケシ栽培の自由、女性が売春をする自由、夫を失った女性たちが街角で物ごいをする自由、貧乏人が餓死する自由だったと言っても言い過ぎだとは思いません。現在、あのちっぽけなカブールは 500 万人の干ばつ避難民であふれています。

一方で、きらびやかな服装をした上流階級が外国人と歩いています。外国人は、英語が流ちょうで考え方が先進国の人々に似た人と主に接触しますので、あたかも、それがアフガニスタンで起こっている復興であるかのごとく思われます。

一方で、新宿顔負けの華やかな風俗がはやるかと思えば、すぐその脇では、無数の、数百万人のスラム街が広がっていて、一触即発の状態です。しかも辺境では内乱が絶えない状態です。私が数日前、アフガニスタンを出てくる時点でも、タリバン勢力の実行支配が着実に首都を包囲している状態です。

しかし、世界にはそれが知らされません。日本でテロ特措法だのなんだのと議論を聞いていると、非常にむなしい感じがするのです。人々にとって必要なのは、まずパンと水だったと。そこで安定した生活が送れることだと。

それも保障されないまま、自由だの、民主主義だの、国際協調だの言っても、私たちには、うそのように聞こえるわけです。

水の確保と農業への取り組み



私たちは、今まで方針を変えたことはなかったし、これからも変えないだろうということで、あたかも何事もなかったかのように活動を続けたわけです。もちろん医療が柱ですけども、そのために清潔な水の必要性を感じて、飲料水確保事業が始まりました。

さらに十分な食糧生産がないことには、この地域から病は減らせないということで、砂漠化防止と同時に食糧自給率の増加ということで、農業用水を確保すると同時に試験農場をつくりまして、乾燥に強い作物付けを、この6年間、地道に続けてきました。

農業というのは、その地域の特色、地理条件、気候を敏感に反映したものであるもので、日本でいいからといって外国でいいとは限りません。いろいろ試してみましたけれども、現在のところ、最も脈があるのはサツマイモです。

2年前から、サツマイモの種芋が盗まれるようになりました。皆さんも体験があるでしょうけれども、本当は欲しくないものをもらったら「そんなのいらないよ」とは言わずに、「どうもありがとうございます」と言って、放っておくのが普通ですけども、本当に要るものは自然と広まっていくのです。

今のところ脈があるのはサツマイモですが、とうとう種芋がなくなりました。みんなは増やし方を知らないのです。それで、つるからもサツマイモは増やせますので、私は去年、一計を案じまして、「つるからもサツマイモは増やせるので、つるも取ってはいけない」といううわさを流しますと、翌日からつるが取られるようになりました（笑）。すごい勢いで広がりつつあります。

そのほか、農業関係についての面白い話もたくさんあります。そばも有力候補として浮上してきました。どんな乾燥地帯でも、数週間ごとに水まきをすれば、そばは収穫できるのです。

ただし、好みの問題があって、現地では、日本人のように長いそばを食べるわけではないので、それを何に混ぜたらいいか。小麦粉を増やすための材料として、香ばしくて食べやすい。そういった料理の工夫もしながら、少しずつ食糧増産を続けております。

地下水の減少と用水路工事

さらに、初めは地下水に頼った農業用水の獲得が主でしたが、その水位が年々下がってくる状況です。おそらく、これは地球温暖化と関係が深いようで、年々、山の雪が減ってくるという現象があります。つまり、伏流水である地下水も減りつつあるのです。

地下水を永久利用することはできないというのが私たちの読みでありまして、ならばということで、雨水を直接ためる方法。すなわち、中小河川では無数のため池をつくること。また、何世紀かは枯れないだろうということで、大河川からの用水路をつくることをもくろみました。

インダス川の上流ですから、高い山々から水が流れてくるのです。それを比較的大きな用水路に導いて、乾燥地帯を一挙に潤してしまえということで、全長 20 キロの用水路のうち、2003 年の 3 月には第 1 期 13 キロの工事に着工しました。

この乾燥地帯はもともと豊かな牧草地帯で、一部は水田もあったところだったらしいのです。それが 20 年ぐらい前から、次第に乾燥化が進んで、今では土漠と化してしまいました。こういったところは、アフガニスタン中に広がっているわけです。

アフガン復興には道路もいるし、学校もいるし、教育も必要だけれど、まず人々が生きて生活しなくてはいけないというのが私たちの持論でした。こういった地域へ一挙に水を引いて潤そうというわけです。

といっても、何もありません。日本だったら、金さえ出せば重機は自由に手に入るし、ゼネコンもあるし、土木工事もどんどんやれますけれども、現地ではショベルとつるはしだけが頼りでした。用水路がくる、自分の村に水がくるのだということで、うわさを聞いて難民化した人々が集まってきました。

もちろん、日当は払っていますけれども、240 円です。水がきたら自分で耕して食べるわけですから、こういった地域の人々が一体になって、自分で汗を流して水路をつくっていったということです。

日本の農業土木技術の活用

そのとき、日本側として随分役立ったのが日本の農業土木技術です。これは決して、日本の現在のようなコンクリートをふんだんに使った土木技術ではなくて、武田信玄の時代、戦国末から江戸時代に完成された日本の農業土木技術です。これが現地で大活躍しました。

その最も大きなものが、蛇かごと呼ばれるものです。簡単に言うと、金網の中に石を詰めて護岸に使うものですが、これも 600 トンのワイヤーから 1 万 5,000 個の 2 メートル蛇かごとがつくられました。つなぐと 30 キロメートルになります。



これが水路の構造ですけれども、日本の伝統的な技術である蛇かごを護岸としまして、柳枝工と言うのですが、柳を背面に置いてやりますと、柳の根がしっかりと石の背面に生えてきて、たとえ金網がさびて崩れても柳の根っこが石を抱えて護岸をしっかりと守ります。これも日本の、昔の人の知恵だったわけです。

こうして、現地の人々の伝統的な技術と、日本の伝統的な技術とを重ね合わせて、無事、今年（2007 年）の 4 月に第 1 期工事が完成し、現在、第 2 期工事が進行中です。全長 16 キロメートル地点が間もなく完成しますと、3,000 ヘクタールが灌漑に浴します。



この写真のように、土木作業員のようなこともしています。私たちは住民と一体になって仕事をしておりますから、我々を攻

撃する人は誰もおりません。それもそのはずで、みんなの命、生命、生活にかかわる事柄を、一緒に汗を流してやっているからです。

皆さんがよく新聞でご覧になる武装勢力は、ほとんどが地域住民そのものです。現地のアフガン農村では、成人男子のすべては同時に兵員でもあります。ちょうど日本の戦国時代、武士と百姓が未分化であった世界に近いわけです。

彼らが我々を襲撃しようと思えば、いつでもできます。しかし、それはしないのです。もちろん、一緒になって働いているからです。ときどき襲撃する者がいるとすれば、米軍のヘリコプターが我々を機銃掃射してくることぐらいです。

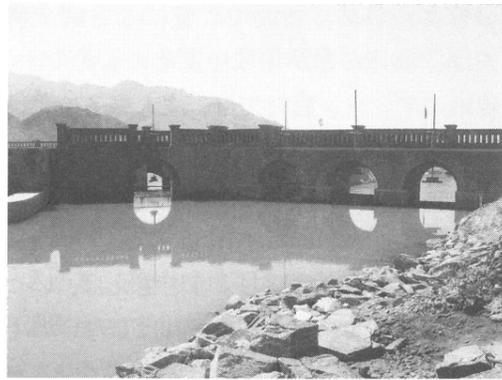
村の復活



この取水口は、私が昔の人の気持ちに戻りまして、九州筑後川にある山田堰というところをモデルにしたもので、これが現在、見事に力を発揮しております。特に今年の夏から秋にかけて、アフガニスタンは史上最悪、2000 年をさらに何倍か上回る大干ばつに襲われるのは確実でありまして、川の水がことごとく低くなって水が引けな

い状態です。

その中であって、唯一、この取水口だけが生き残って、現在、約 3,000 ヘクタールをこれ 1 本で賄っています。



このように、日本の^{まきいた}堰板方式と呼ばれる農業土木技術の一つも用いられています

2 年前から本格的な灌漑が始まりました。特に今年、次々と、川沿いの取水口が枯れていき、雨も降らないという中で、私たちの用水路は、地域で非常に重きをなしていて、数千ヘクタールが私たちの用水路 1 本で賄われております。これが年度内に完成しますと、合計で約 1 万ヘクタールが灌漑に浴する。そうなれば、十数万人以上の人々が、帰って来られることになります。

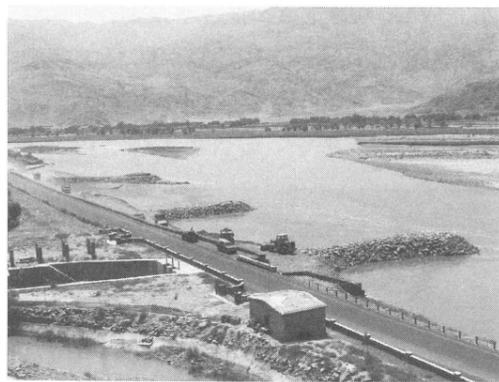


これも、元は砂漠地帯であったところですが、こうして次々と緑化していきました。

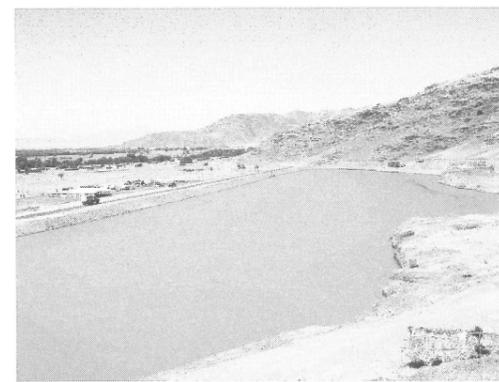


土石流が谷を横切ったのは、今年の今ごろです。必死の工事が続いておりましたが、無事に通過しました。これはサイホンと呼ばれるものですが、なんと、出来上がった翌日に土石流がやってきて、肝を冷やしたこともありました。

我々が仕事を始めたときはほとんど無人化していた地域に、家があちこちと建ち始め、村が復活したのです。みんなは喜びました。そして、多くの難民たちが帰ってきました。



この作業も危ない場面がありましたが、石出し水制といって、かつて日本でおこなわれた護岸技術です。これが、見事に私たちの用水路を守りました。



これは 13 キロ地点の貯水池です。現在、この 3 キロ先まで完成しつつあります。



私たちが思うのは、平和というのは、決して武器では達成できないということです。人々の平和な暮らしを取り戻すことが、血なまぐさい争いから私たちを遠ざけてくれるのだと、私はますます確信するようになりました。



第 2 期工事によって、広大な面積を潤し

ます。これは現在進行中です。

助けることは助かること

時間が迫ってきました。暗い話ばかりしましたけれども、では、アフガニスタンの人々が暗い顔をして生活しているかという決してそうではなくて、助っ人に来ている日本人の若者たちのほうが暗い顔をしているのです。

これは、どういうことなのか。明日、ご飯が食べられない人のほうが生き生きとしていて、日本で生きがいを見つけられずにやってきた若者たちのほうが暗い顔をしている。これは年来、私の疑問でした。

一般に、何かを持てば持つほど人間の顔は暗くなっていくのです。失うものも増えていくのです。

私も初めの頃は「かわいそうに。助けてあげなきゃ」という気持ちがなかったわけではありません。これは決して悪いことではありませんけれども、なにか高いところから低いところに、金でも投げ込んであげようような気持ちが全くなかったとは言えません。

しかし、今、振り返って考えてみますと、実は助かってきたのは自分たちではなかったかと思うわけです。

今、世界を覆っている迷信は、「金さえあれば何でもできるのではないかな。経済さえ上向きになれば、ばら色の世界が我々を待っているのではないかな」という迷信です。そして、「武器さえあれば、この身が守られるのではないかな」という迷信です。私たちは、この迷信にとらわれず、自由にものを見ることができるようになったという

ことです。

「情けは人のためならず」と言いますけれども、私たちは、この二十数年の事業を通じまして、「人間が最後の最後まで失ってはいけないものは何なのか」「これはなくても、人間らしい生活ができるというものは何なのか」ということについて、一つのヒントを得たような気がするわけです。

今後も、「現地の事業は私たちのためでもある、助けることは助かることだ」ということで、日本人みんなの良心的な事業として継続していきたいと思っております。

以上で私の話を終わらせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。

平成 20 年 3 月 31 日 発行

編集／発行 山口県立大学附属地域共同研究センター
〒753-8502 山口市桜島 3 丁目 2 番 1 号
TEL 083-928-5622

印刷／製本 (有)いづみプリンティング
〒753-0051 山口市旭通り 2 丁目 6 - 4 7
TEL 083-924-4607
